

新潟医療福祉大学言語発達支援センターの活動報告

新潟医療福祉大学言語聴覚学科・吉岡 豊, 糟谷政代
 新潟医療福祉大学言語聴覚学科・山岸達弥, 渡辺時生
 山口富一, 志村栄二
 新潟大学医歯学総合病院歯科・佐藤真由美

【背景】

医療福祉系大学に相談センターのような施設を設置している例はいくつか認められる¹⁾。2010年5月に新潟医療福祉大学言語発達支援センターとして活動を開始して以来1年余が経過した。センターに来訪する人数も徐々に増え始め、本センターの存在も新潟市北区を中心とする地域に浸透しつつある。本センターの設立の目的は新潟市北区を中心とした地域への貢献活動の一環として、言葉に遅れの認められる子どもたちの言語発達を支援することである。本報告ではセンターに来訪した子どもたちがどのような地域から来ているのか、またどのような言葉の問題を抱えているのか、などについて検討した。

【方法】

センター開設以来一度でも来訪にした患児16例を分析の対象とした。調査内容は①地域特性、②初診年齢、③言葉の問題について、④紹介経路、⑤センター全体として月ごとの訓練回数について行った。

【結果】

1) 地域特性

センターを一度でも訪れた子供の居住地は新潟市内が5例と最も多かったが、聖籠町4例、新発田市4例と県北からの来訪者が最も多かった。また、最も遠い地域は阿賀町からであった。

2) 初診年齢

センターでの初診年齢は3歳代4例、4歳代4例、5歳代3例と就学前が大半であった。その一方で、就学年齢を越えての初診例も認められ、最も年長であったのは17歳であった。

3) 医学的診断名および言語障害の種類

来訪時点で医学的診断名が明らかであったのは8例で、自閉性障害が4例、ダウン症が2例、精神遅滞(疑い)が1例、口蓋裂が1例であった。

初診時の主訴は言葉の遅れが16例中12例であったが、そのうち特異的言語発達障害は1例のみで残りは全般的な言語発達遅滞であった。構音障害は口蓋裂や機能性のものであり、吃音も認められた。

4) 紹介経路

紹介元の記載があった場合にどこから紹介されたのかを調べた。その結果、役場や保健師、医療機関など公的なところからの紹介が7例と最も多かった。

5) 月ごとの訓練頻度

センター開設以来の来訪延べ人数を開設時より2011年5月まで見たところ、2010年5月から2011年3月までは4~18人であったものが、2011年4月よりは平均20人を越える来訪者数になった。

なお、1回の来訪での指導時間は平均1時間強であり、病院の言語聴覚療法の3単位に該当していた。

【考察】

本研究の結果、言語発達支援センターは当初の目的通り、新潟市周辺の地域にあった潜在的要望に答えているものと思われる。しかも、公的機関からの紹介が多くを占めており、本センターの認知度も向上しているものと思われる。

来訪児に認められる言語障害は、自閉症によるものが最も多かったが、医師による診断がついていない例も認められた。今後は小児科や耳鼻咽喉科、口腔外科などを中心とした医療機関との連携が求められるものと考えられる。また、5歳を過ぎてから初めて言葉の相談に来た例もあり、医療機関との連携が初診年齢を早めることに貢献するのではないかと思われる。また、本センター以外の福祉施設に通園している例も見られたことから、これらの施設との連携も今後の大きな課題として挙げられる。

【結論】

新潟医療福祉大学言語発達支援センター開設後の活動内容を報告した。本センターは近隣地域の潜在的要望をくみ上げているものと思われ、今後は医療機関や児童福祉機関などとの連携を深めていくことが課題と思われる。

謝辞: 言語発達支援センター設立にあたっては平成22年度新潟医療福祉大学研究センター推進費の援助を受けた。ここに深謝する。

【文献】

- 1) 今給黎禎子, 笠井新一郎, 藤原雅子, 中山翼, 山田弘幸: 特異的な発達プロフィールを示した言語発達遅滞の一例. J. of Kyusyu Univ. of Health and Welfare. 2008;9:121-126.